

「坂口安吾『吹雪物語』」論序説

へふるさとを語るために

博士後期課程一年 大原 祐治

とは対照的に、およそこの仕事に魅力を感じていない。およそあらゆる故郷の郷土性に関心を示さない彼は、まさしく「何処に生れたのでもない都会人という抽象人の顔」（小林秀雄「故郷を失った文学」、昭和八年）をした「故郷喪失者」なのである。そして、このような「故郷喪失者」が積極的に自らの故郷（あるいは、故郷としての日本）を見出すのが同時代の文学の主題であったわけだが、卓一はそれを拒んでいる。

坂口安吾の文学は「へふるさと」という言葉と不可分な形で語られる。その「へふるさと」とは、直接的には「文学のふるさと」（昭和六年）というエッセイの中で示される概念であるが、それは一種の突き放し、救いのなさのことであり、およそ一般的な意味での「故郷」とは異なる。しかし、昭和一二年の日中開戦以降、故郷回帰・日本回帰というナショナリスティックな傾向を示し始める時代相を勘案すれば、ふるさと＝故郷という主題そのものはとりわけ突出したものではないはずだ。そして、物語の舞台として坂口安吾自身の生まれ故郷である新潟を舞台とし、そこに帰郷してくる主人公を描いた長篇「吹雪物語」（昭和一三年）とは、さしあたり安吾が同時代の重大なテーマであった故郷の問題に深くコミットした小説として読まれなければならない。昭和一六年になって書かれた「文学のふるさと」に先立ち、「吹雪物語」において安吾がいかに故郷＝ふるさとをめぐる物語を描いたのかということが、その後の安吾の展開を考える重要な軸になるはずなのだ。

「吹雪物語」で、主人公青木卓一は東京から帰郷し新潟で地方新聞の編集長を務めるが、同時期の新潟における地方新聞が全国紙の進出に拮抗する形に変革期を迎え、アクティブな展開を見せていたの

しかし、そのような卓一もまた、ダンスホールで偶然出会った幼馴染、嘉村由子との関係を、積極的にかつての新潟の記憶を引き出すことで始めているし、何よりも、突然の来訪によって再燃する、かつての恋人の古川澄江との関係は、他ならぬ「吹雪」という、極めて雪国の風土の中で始まるものだった。卓一はこの吹雪に閉ざされた新潟を「絶海の孤島」にも見立てるが、現実には昔日とは異なり、交通機関はすぐに復旧する。結局、澄江は数日の内に新潟を去ってしまい、勢い込んで彼女との「結婚」まで口にした卓一は、それまでは遠ざけてきた故郷の風土へ積極的にコミットしようとしながら、かえって強力で拒絶されていると言える。そして、卓一ら主要人物は、新潟から離散する。

実際の新潟が日本の大陸進出上の要衝として強く戦時色を帯びて見出される昭和一三年に安吾が書き上げた物語は、およそそういった故郷にはコミットし得ないのだ。投げやりな結末は、安吾自身の自己言及とも相俟って、しばしば「失敗作」との評も受けているが、「文学のふるさと」、あるいは「日本的」な「伝統的美」の虚妄を突く「日本文化私観」（昭和一七年）の思考とは、この「吹雪物語」の「失敗」にこそ導かれている。